

江戸から明治時代を生きた洋学者、箕作麟祥の編著書だ。フランス革命から普仏戦争あたりまで約80年間の近代世界史を、ほぼ同時代を生きた人間の視点からつづる。幅広い知識と優れた叙述水準を併せ持つ世界史の本であり、教科書といつても差し支えないだろう。

国立国会図書館のデジタルコレクションに収録

麟祥は1811年戸の津山藩邸で生まれる。藩医の蘭学者だった祖父の影響で、早くにオランダ語と英語を習得。19歳で外国奉行支配翻訳御用頭取となり、福沢諭吉や福地源一郎らと交流を

「萬國新史」は麟祥が文部省翻訳局にいた71～77年に編んだ。当時の日本には主な世界史の本として西村茂樹編「萬國史略」や寺内章明編「五洲紀事」があつた。いずれも洋書の翻訳だが、麟祥の「萬國新史」は複数の洋書を参考して内容を消化し、自ら執筆もしているのが特徴だ。

塚  
信  
吾

く事実確認には苦労した。インドや中央アジアでは見たことない地名や人名が出てくる。専門家に問い合わせると、半は麟祥の叙述が正しつた。明治期によくもここまで海外の動向を正確に把握していたものだ。何度も感嘆させられた。フランスの哲学者ルソーを「その性激烈にして、そこぶる異常、人を驚かすの説を講じ」などと

記かてソ。と確こか大門名アじ庄  
ジア、凶暴強の争いは日本が翻

# 文 化

されていいるが、これまで手書きの本しかなく、活字で出版されたことはなかった。加えて明治初期の文体は読みにくい。そこで私が所長を務める世界史研究所（東京・渋谷）のチームで約5年かけて、本書を翻刻し、このほど

持つた。

67年、パリ万国博覧会に出席する徳川慶喜の弟、昭武に渋沢栄一らと共に隨行し、そのまま仏留学。帰国後は文部省と司法省に兼勤し、フランソワ・コンドルセの「憲法」を「憲法」と訳し、日本で初めて「権利」「義務」という訳語を用いた。

際関係史を研究してきた私が、明治期に刊行された世界史に興味を持ったのは、20年ほど前。松本城に近い古書店で幕末の探検家として知られる岡本監輔の「萬國史記」(9年)を手にしたのがきっかけだった。何気なくめぐくると、東欧諸国の記述が目に留まった。こんな時代から東欧にも関心を向けていたのかと驚き、同時代の世界史書を探し

は目を見張る。面白が  
没頭し、当時勤めていた  
法政大学の最終講義  
「萬國新史」を扱った。  
日本史や東洋史、西  
史という区分が成立す  
前に執筆された本書は  
世界各国を自在に取り  
上げながら叙述する。そ  
後の日本で長く支配的  
つた、西洋の国民国家  
軸にした歴史研究とは  
線を画す。ボーダーレ  
に世界を見つめる内

方で「民約」と訳した彼の社会契約論を「君臣の区別、政体の大綱、その源みな國中の人民たがいに契約して設立せしところに出ず」と本質を簡潔に言い表している。

弄される可能性に警鐘を鳴らしているようだ。よつやく翻刻を終えたが検証作業は続く。東京大学法学部の図書室には麟祥の孫が寄贈した「箕作文庫」がある。歴史に関する英仏独語の本を90冊ほど含み、丹念に追えば「萬國新史」がどのような文献に基づいて成立したか明らかになるだろう。翻刻書が多くの人々に読まれ、今後の歴史研究